

藤田先生のこと

樋口 欣一

晩秋の熊本をいりどる美術展が、どれも大変な盛況のなかに、またいくつもの新しい話題をそえて開かれた。それら展示の中でも藤田嗣治素描版画展は、私の記憶を呼びさまし、私の脳裡に深く刻みこまれたもの一つであった。

て、その時寄贈された二幅の画がたしかな空間を留めて母校に現存していることから、時の流れを知るのみであったものが、今このようにして、現実に再会の機会に恵まれたのである。

田町)だったね」と、いかにもなつかしそうなことばがもれた。むぞうさにかぶったチロル帽の下には、あの特徴のあるオカッパ頭があるはずだが、かいまみえるヒゲの白髪も、今はひたすら神に奉仕する画境の崇高さを示すかのようになり、きらめいてさえた。

若柳 喜千信

戦後間もないある日のこと、モンペ姿で子供を背中に、うららかな春の日ざしに、さそわれるように近くの八百屋まで行ったら、おかみさんが、出てきてそっとささやくように「いままの先生が来てますよ。見てみませんか」と言った。

く、みじめであった。労働はきつ、朝暗いうちから田んぼへ出て、夕べに星を仰いで帰った。

主人はいつか、子供達に「自分で考えてやりたい、と思ったことは自由にやりなさい。しかしお互いに家族の者に迷惑をかけぬように責任を持ちなさい。決してお父さんも君たちに迷惑をかけるようなことはしない」といった。私もこのことを肝に命じた。

いしてこられたことを私は誇りに思っている。ある長老に「どんなに自分が正しいと思っても、トコトンまで相手を追い込んではいけない。相手が自分の間違いに気づいて和解しようと思った時、はい余地がない」と教えられた。この言葉こそは私にとって最大の教訓として終生忘れることはできない。私は自分の短所はよく知っている。だから反省して苦しむことが多い。せっかくな社会に出てくれた主人の願いである「角」が、末だに丸くなりそうにもなく、大変申しわけなく思っている。

じゃつたげな、となる。それも、三十年も勤めて……。人生の大半を全力投入し、死して得た最後の報酬が、たった田んぼ一反だ。これは、農民らしい素朴な皮肉、諷刺ではある。しかし、この言葉の背景には、宅地ブームにわく近郊農村の、尊大ぶった価値観があるようで、私はひどく悲しい気がした。この農村は、実は私のふるさとである。

く、みじめであった。労働はきつ、朝暗いうちから田んぼへ出て、夕べに星を仰いで帰った。

ふるさとの現実

舟越 光好

「三十年も勤めて、退職金はたったの田んぼ一反じゃなかった」。こんなウワサが広まっていた。私には、なんのことか、サッパリわからなかつた。よくよく聞いてみると――

肥後の武将、菊池武敏が、足利尊氏の軍勢と戦ったのは、筑前の国、多々良ヶ浜であった。私は子供のころ、このふるさとを、大変自慢にしていた。かつての本陣は、いまでも陣の越と呼び、一段と小高い山の上にある。一抱えもある大松が生い繁って、いかにも古戦場らしい風格を残していた。私の家の裏山からは、ポロポロになった錆び刀が出て来たこともある。松籟の音は、数百年前の戦場の雄叫びを聞くようであった。

く、みじめであった。労働はきつ、朝暗いうちから田んぼへ出て、夕べに星を仰いで帰った。

私は婦人会もなかなかの勇気が必要だと決心した。それから十四年。今だに後を受けてくれる人がいないのはどうしたことだろうか。ご主人がたのご理解も必要だが、まず家庭の主婦そのものが井戸の中の蛙であってはならぬと思われ。自分のやってることが、家庭にプラスになるか、マイナスになるかは、本人の心がけ、考え方によるのではなからうか。要は信念を持って進むということだろうか。その点、現代の若者たちは男女をとわず非常に「きり」と社会を見つめている人が多くはなからうか。「自分の人生は自分で作る」という気迫がみなぎっているようにみえる。

「近頃は、坪一万円してはいた。三百万円だと、三百坪買える。それなら一反じゃないか、というわけである。そこで、〇〇さんの退職金は、田んぼ一反

「町に住む人は可哀想だ。水まで買わねばならぬ」。そのころ、といつても、約四十年前だが、農村では、何も彼も自給自足を建て前にしていた。飲み水や薪はもちろん、味噌、醤油までも。そしてゼニを極力節約した。都会に比べて、暮らしは貧し

く、みじめであった。労働はきつ、朝暗いうちから田んぼへ出て、夕べに星を仰いで帰った。